

『好色五人女』の出発点

——『梶久一世の物語』との関連を主に——

小 森 啓 助

後)も、主としてこの点についていわれたものと思われる。

『好色五人女』各巻の素材となった実話がどのようなものであつたかは、必ずしも明らかではない。が、作者が、歌祭文などに伝えられる比較的単純な事件を骨子として、さまざまの趣向をたて、思うままに創作の筆を走らせたのであろうことは、間違いなく推測されるところである。そして、この作品がわれわれの興趣を呼び、文学としてのおもしろさを主張できるのもまた、事件そのものの顛末ではなくて、奔放に付加されたこの脚色のゆえであると称することも許されるだろう。「各巻各章ともに、物語が平板な記述に流れることなく、極めて劇的な場面を中心にして立体的に凝結し」「人物の配置・動作も演劇的で」「一卷五章から成るそれぞれの物語が、全部五幕からなる芝居のように有機的な構成を持っている。」という野間光辰氏の評(『岩波講座・日本文学史』所収『西鶴と西鶴以

後)も、主としてこの点についていわれたものと思われる。巻一のおなつ・清十郎物語の第一章「恋は闇夜を屋の国」は、主人公清十郎がおなつと知り合つ、姫路の但馬屋に奉公するまでの生活を描いた部分にあたるが、さしあたり、作者の設けた脚色の主要なものの一つに数えられよう。播州宍津の裕福な酒屋の息子に生まれた清十郎は、生來の美貌にも恵まれ、年少のころから土地の遊廓に入りびたる。あげくには、乱痴氣騒ぎの馬鹿遊びをしているところへ、たまりかねた親仁にふみこまれてしまつ。もはや商売にならずとみた揚屋では、とたんにサービスが悪くなり、なじみの遊女皆川の情死の申入れもさえぎられて、十九歳の清十郎は、無理やりに旦那寺へ預けられる身となった。以上がこの章のあらましである。おなつとの恋物語に直接関係のないという話が、まず最初に掲げられているのは、どういう理由によるものなのだろうか。また、どういふ意義があるのだろうか。この章の趣向について、東明雅氏

は、淨瑠璃や歌舞伎の傾城場をことさらに挿入しようとした感が強く、特に、当時評判の坂田藤十郎狂言の濡れややつしをあてこんだ趣がある、とされる（岩波文庫本『好色五人女』解説）が、そういう意味での趣向の問題はともかくとしよう。続く第二章を讀んでいくと、但馬屋の店に入った清十郎が、ある時、女中にくけ直しを頼んだ帯の間から、おびただしい室津の遊女の手紙が出てきて、それ

をみたおなつが、「さて内証にしこなしのよき事もありや。女のあまねくおもひつくこそゆかしけれ。」と、思慕の念を燃やすにいたる場面が出てくる。第一章の遊興歴がその伏線であったのだと、誰しもそう思うに違いない。ところが、重友毅氏は、こういう常識論にきびしい批判をくだす。ここにいう「内証」は閨房のテクニクなのであって、「説をなす者」がおなつの恋慕の動機を、清十郎が遊興によって得た、洗練された美意識や教養の持主であったためであるとするのは、明らかな誤りである、それは美意識や教養などとは結びつかない、下の下のものであった清十郎の遊びそのものからも証明される、また、おなつとの交渉に入った後の清十郎にしても、遊興体験の厚みがなく、妙に初心である、といわれる（『近世文学史の諸問題』所収「好色五人女の本質」）。

なるほど、清十郎の遊び方には、美意識や教養の糧となりそうなものはなかったかも知れない。おなつに対して初心めいてもいたで

あろう。だがしかし、第一章に書かれている、はめを外した清十郎の放蕩からのみ、彼の前歴を無意味なものと否定し去り、これを一つの理由として、おなつとの結び付きの動機を他に求めようとする考え方にも、なお、いささかの疑問が感じられる。また、清十郎が初心めいていたかどうかについても、もう一度あらためて検討してみる必要が残されているように思う。

室津は、本邦遊女癡祥の地と伝えられるが、土地の人さえ、「野夫船子やうの者のみ入りこみて、心ある人の来るは稀なり。」と訴える（『色道大鏡』）。所詮は、品位の高さなど求め得べくもないが、とはいえ、何の風情もない、全くのありふれた田舎遊廓であるのでもなかったようだ。「室の傾城は、さまで鄙めかず、物いひの色も聞きにくからず、あさはかにいやしげすくなし。」（『色道大鏡』）「風儀もさのみ大坂にかはらず。」（『好色一代男』巻五の三）と書かれている土地柄であった。「一代男」では、大津や堺などとともに、巻五に出ている。順序からいえば、その第一章で、世之介が吉野大夫と祝言を取りかわした後のことである。世之介の好色修行も仕上げの段階に入っているといえよう。そして、室津が『一代男』でこの位置におかれているということは、西鶴の室津に対する一つの評価が示されているものと考えられるであろう。

世之介をはじめ、ひやかし半分でここを訪れる。氣に入る相手が

あるうとも思えず、「女郎おもひくゝの身嗜、みる程笑し。」となめてかかっている。香木などには一向に興味もなさそうな、「はしたな」い女どもばかりとみえた。ところが、偶然その中に、一人のまことに心ゆかしい遊女を発見する。世之介の取り出した香をびたりといいてながら、しかも控えめな様子のしおらしさ、部屋にあっては、「秋までのこる蜚を数包みて、禿に遣はし、蚊屋の内に飛ばして、水草の花桶入れて、心の涼しきやうなして、都の人の野とやみるらん」との心づかい、「仮にもさもしき事ははず」「人のほしがる物」を手にとろうともしない気品、これらが世之介を魅了し尽くすのである。さすがに「西国第一の湊」の由緒古い遊廓だけのことはあった。「春の海しづかに、宝舟の浪枕、室津はにぎはへる大湊なり。」と、清十郎物語を書き起こした西鶴の頭の中に、「一代男」の読者ならすでに知っているはずの、あの室津の話ですよ、という前提があったとみても、不当ではあるまいと思う。そういう場所鍛えられた彼のどこかに、ただの田舎大尽ではないものの内在が想定されるのではなからうか。

もちろん、土地柄がそうだからといって、それが直ちに、清十郎の美意識や教養に結びつくものではない。ある程度の条件をつけるにしても、『五人女』に描かれた清十郎の言動によって、この想定を積極的に証明することはむずかしい。実のところ本文では、「十

『好色五人女』の出発点

四の秋より色道に身をなし、此津の遊女八十七人」に総当りして、心中立ての鬘紙や爪・髪の種類を『浮世蔵』に貯蔵していた「たはけ」ぶりと、座敷の建具を閉めきらせて「昼のない国」をする、趣味の悪い馬鹿遊び以外のことは、遊興状況に関して、何もわからない。「下の下」だといわれても仕方がないし、そのかぎりでは、こういう遊びによって得た教養がおなつをひきつけたとするのは、「説をなす者の想像」の域を出ないともいえよう。

一応そうではあるけれども、『浮世蔵』の件は、『色道大鏡』にも、「有功の家貨にして色道の靈宝たり。」とあるくらいで、別段問題はない。また、「昼のない国」の方も、暉峻康隆氏（『西鶴・評論と研究』西鶴著作考）の指摘のとおり、すでに前作『梶久一世の物語』（上巻第五章）に、類似の遊びが出ている。笠井清氏は、『好色二代男』巻一の三「詰り着に戎大黒」中の狂態の発端が、『梶久』の右の個所に似た叙述で始まっていることも指摘されている（『梶久一世の物語』評釈と論考）。『梶久』の方は大阪の新町、『二代男』の方は京都の島原の揚屋での話である。あくどさの程度に多少の差があり、もとより品の高いまともな遊びではないけれども、実際に、新町や島原においてさえ、この種の遊びがしばしば行なわれていたとみななければならない。特に、梶久の遊び方と相似している点は、後述する両物語の関係の一環をなす。これも笠井氏によっ

すでに引用されているが、『好色盛衰記』（巻一の二）には、

大かたの事しはおもしろからず。昼の月見、夜の花見、世のつねをはなれ、人のせぬ事をするこそ、悪所宿の自由なれ。

とある。一通りの歓楽を経験してしまつた人たちの追い求めたもの一つが、「人のせぬ」悪ふざけであつたといえようか。重友氏が、当時の遊興一般がやかもすると放埒になりがちであつたことは事実であるにしても、と断つていられるのは、こういう事例にもつくものであろうが、これらを見ると、清十郎の行動を、一概に、田舎遊廓における田舎青年の泥くさい遊びだと、きめてしまふわけにはいかないと思う。

新町や鳥原の大尽がそうであつたように、清十郎とて、いつもかそんな遊びばかりに熱中していたわけではあるまい。暴露的な興味に筆が進むのは西鶴の常とするところであつて、もう少しまともな遊びがあつたことも当然考えられる。大阪や京都の客が、何らかの意味で、美意識や教養を身につけていたとするならば、おなつの前に現われた清十郎にもまた、清十郎なりの美意識や教養がただよっていたはずである。たまたま取り上げられた馬鹿さわぎの一事をもつて、これを否定することはできないであらう。

おなつが清十郎を慕う動機が、閨房に関する「内証」のよさであるとする、良家の子女の感覚としては、やや異常とせねばならな

いとはいへ、なるほど西鶴は、おなつをそのような性情の娘に仕立てている。のちに第三章の花見の場で、大勢の女中たちの眼を盗み、わずかなチャンスをとらえようとするおなつは、「かかると時、はや業の首尾もがたと氣のつく事、町女房はまたあるまじき帥さま也。」と評される。そういう娘なのであつてみれば、「内証」の意味をそのように限定するのも、一つの見方として首肯できる。しかしながら、右に述べたような観点からすると、おなつはただ単に、清十郎を情欲の相手としてのみ選んだのではなく、彼にある、もっと内面的なものにも心ひかれるものがあつたのではないか。帯の間から出てきた多くの窠君の手紙が、いずれも、「勤めのつやらしき事」はぬきにした、「誠をこめし筆のあゆみ」であるのをみて、

是なれば、傾城とてもにくからぬものぞかし。又此男の身にしては浮世ぐるひせし甲斐こそあれ。さて内証にしこなしのよき事もありや。女のおまねくおもひつくこそゆかしけれと、いとなく、おなつ、清十郎に思ひつき、……

とある。「浮世ぐるひせし甲斐」、つまり遊興の成果が、おなつの考える「内証」のよさであつた。「内証」の語義についても、再検討が加えられねばならない。水掛論のそしりを免れぬかもしれないが、私はそう思う。

『五人女』は、西鶴が一応遊里と訣別して、市井男女の愛欲を取り上げた作品であり、『梶久一世の物語』とともに、いわゆるモデル小説でもある。『梶久一世』は、大阪の豪商梶屋久右衛門の狂蕩と、没落から水死までの過程を、上下二巻・十三章（上巻七章・下巻六章）に綴った物語であるが、特に『五人女』と、さまざまな類似点や共通性を有していることは、前に引いた笠井清氏「一評釈と論考」の丹念な対照に詳しい。好色物を中心とする西鶴の諸作品の中で、抜き去り得ない位置を占めていることについても、同書に論及されている。笠井氏が、これらの点から、逆に、それが『五人女』とほぼ同一の時期に書かれた西鶴の作品であることを立証しようとするのも、もっともといえよう。刊記は貞享二年二月二十一日、『五人女』出版の約一年前にあたる。

このような関係にある二つの作品であるから、『梶久一世』の残照が、『五人女』の中でも、とりわけその第一巻の第一章に、色濃く投影していて当然ではあろうが、笠井氏の指摘以外にも、いろいろな相関性が認められるように思う。目に触れた主要点をあげてみることにする。

まず、起筆の部分である。『梶久一世』の、

『好色五人女』の出发点

毎年正月七日に、津国箕面山の弁才天の富突とて、諸人福德を願ひまゐる事あり。是を思ふに、皆欲に目の見えぬ夜の道、浮世小路の悪所駕籠、四人揃へのひとへ物に染込の扇の丸、肩で風きらして行く人を見れば、大坂堺筋に名を聞きし梶久といえる男、縞縮緬の浅黄に、白繻子の長羽織に京の幽禪が墨絵の源氏、人の目立つ程……

というのを、『五人女』の、

春の海しづかに、宝船の浪枕、室津はにぎはへる大湊なり。爰に、酒つくれる商人に、和泉清左衛門といふあり。家来えて、万に不足なし。然も、男子に清十郎とて、自然と生れつきて、むかし男をうつし絵にも増り、其さまうるはしく、女の好きぬる風俗……

というのと比較してみよう。両者が相似していると称するのは、少し強引すぎるといわれるかもしれない。主人公の紹介という点で共通しているといっても、それは別段この場合に限ったことではない。けれども、一方が正月の福德祈願を冒頭に出して、浪速津の繁榮を暗示すれば、他方もまた、「春の海」以下、室津の股賑をたたえる。「堺筋に名を聞きし」に対しては、和泉清左衛門という固有名詞をあげて、著名な酒造業者であったことを言おうとする。墨絵の源氏に代えては、清十郎自身が「むかし男をうつし絵にも増り」とい

う。露骨な一致はみられないにしても、類似点はかなり多いとしなければならぬ。『五人女』のこの章の標題に「恋は闇夜を昼の国」とあるのも、『腕久』の「皆欲に目の見えぬ夜の国」と対比すれば、物欲を色欲に転じたものとみられる。二つの文章は、同じ発想から出たものといえう。

このあと、『腕久一世』では、二十七歳の正月、弁才天の客殿までろむ腕久にお告げがあり、内蔵の合鍵が授けられる。帰宅してみると、これが正夢であった。亡父の遺産を自由にすることができるようになった腕久は、自己流の遊興哲学で、漸次深みにはまりこみ、病的な様相をさえ呈していく。上巻の数章にわたるこの部分を、もし『五人女』に求め、清十郎の遊興歴如何といえ、さきに紹介したとおり、詳しいことはわからないのだが、いづれ劣らず、家の金を気ままに費消した痴呆状態には差異がなさそうである。

「此だけは、いつ世にあがりてを請くべし。」と作者もあきれかたむせる。「浮世蔵」のことは、腕久にも同様の経験があったらしいことが、第六章の高野詣での条で知られる。

もう一つの「昼のない国」の遊びも、前節で触れたように、『腕久一世』の第五章に、類似のものが出ている。しかし、実質的には、このところは、『腕久』では、上巻の最終章（第七章）「世界は夜が昼」に相当する。標題からして符号している。導入部の文章もま

た、内容的にみて、非常に近い。

腕久其頃は丹波屋の松山といふにあひそめ、ちぎりきな形見の袖の絞を究め、横堀を浪は越すとも、変るな変らじと云ひかはして、明け暮れ通ひぬ。腕久も其頃は、手たれどもにもみ入られて、大かたに帥になつておもしろき最中なれば、誰が意見にても、聴かぬはずなり。（『腕久一世』）

其比は、みな川といへる女郎に相馴れ、大かたならず命に掛けて、人のそしり、世の取沙汰、なんともおもはず、（『五人女』）となつてゐる。

有名な松山が腕久の最も深いなじみであったごとく、清十郎に対する皆川もそうであったのだが、男の方は兩人とも、実は、のぼりつめてすでに破滅寸前の状況にある時であった。結局、これらの女が直接の命とりになったといえよう。腕久は、女房の粹なはからいで、松山を請け出そうとするけれども、もはやそれだけの資力がない。その女房も心配のうちに死んでしまい、「捨つる身」となつて遊里への足もとだえ、「人の交はりもうとく」、放心状態に陥る。

一方の清十郎には、かわい女房のかわりに、馬鹿遊びの最中、こわい親仁が現われた。勘当同然の宣告をうけ、この女ばかりはと思つた皆川との仲もひきさかれる。次の第二章のはじめになるが、心中しぞこなつた皆川は自害して果て、死に遅れた清十郎は、且那寺

の永興院で「をしからぬ身をながらへ」ることになる。梶久同様の放心状態だったのであろう。

梶久の栄華がここで終わっているのと同じく、清十郎の前半生も、ここで終止符が打たれる。いわば、清十郎は、一個の生まれかわった人間となつて、おなつのいる但馬屋に姿をみせるのである。

室津の一件の際、「これで焼けとまります程に、ゆるし給へ。」と親仁に泣きついたのは、とっさの場合の出まかせとばかりはいえまい。

こんなことがなくても、やがては卒業の時期だと、ふだんからそう考えていたのではなかったか。永興院でのしばらくの放心生活は、彼に、過去を清算し、新しい人となり形成する機会を与えたものと思ふ。姫路の清十郎は、たしかに質的な変貌をとげている。その後の彼が、おなつからはたらきかけだったとはいへ、再び色恋沙汰に身を投じるに至るのは、全く別の人格がさせるわざであった。焼けほつくいに火がついた、という性質のものではない。理由は簡単だ。遊里の遊びと素人相手とは、次元が違うだろう。「いつとなく身を捨て、恋にあきはて、明けくれ律義かまへ」(第二章)とあるように、清十郎は、店に入った当初、「女の好ける男ぶり」にもかかわらず、根っからの堅物を装っていたらしい。「律義かまへ」である。そこがまた、女中どもにまで騒がれる彼の魅力でもあった。本心がどうであったのか、表面上の装いからのみ判断はできない

『好色五人女』の出発点

い。けれども、少なくとも彼の心の中には、かつての遊興の体験を、この店にまで持ちこむ気持はさらさらなかったに違いない。体験を生かそうにも生かし得ない別の世界である。また、たとえ生かし得たとしても、生かす意思はなかったであろう。素人娘相手に牛刀を用いる野暮なまねは、色道の熟達者と自負する彼の自尊心が許さない。重友氏のいわれるような、遊興体験者らしからぬ「初心」というものではないと思ふ。

とともに、勝手の違った恋の道には、少なからぬとまどいもあつただろう。おなつの度重なる通わせ文に、「清十郎ももやもやとなりて」(第二章)とある。これが、清十郎のおなつに対して示す最初の反応であったが、女中どもにちやほやされて、「嬉しかなしく、やがては面倒くさくも思っていた矢先である。女中との場合よりは一層複雑な微苦笑が、上気した彼の面上に隠しきれないよう思う。その意味でも、単純に初心とはいへまい。後の話(第四章)になるが、駈落の途中捕えられて幽閉され、「誰ぞころしてくれいかし。」とじだんだんで「男泣き」しながらも、おなつの美形が画餅に帰した計画の蹉跌に、舌打ちする清十郎であった。

三

さて、西鶴が『一代男』から『二代男』へ、さらに『梶久一世』

から『五人女』へと、好色物の創作を進めていった過程については、いうまでもなく、考察しなければならぬ問題が多いのであるけれども、いまは、それに関連して、はじめに提起した、『五人女』巻一における第一章の存在理由やその意義についてのみ、なおしばらく考えていくこととする。

野田寿雄氏は、『二代男』の特に際だった特徴として、次の二点をあげている（『三書房刊』西鶴）。第一は、遊里も結局は金銀の世界であることを言い出している点、第二は、今の遊里は昔にくらべて劣ると書いている点である。野田氏が主として強調されているのは、むしろ第二の点であって、こういう遊里の衰退・墮落は当時の実情を反映するものであるとし、『一代男』を失われた過去の美に対する「憧憬」、『二代男』を現実に対する「反省」の書と規定される。これも第一の点と無関係ではないと思うが、その問題は、ここでは一応除外する。第一の点については、同氏もいわれるように、極めてあたりまえのことである。「今いふもふるけれども、極まる所は銀の世の中。」（『好色盛衰記』巻二の五）「ながく」とつまらぬいひぶん、つまる所は銀。」（同、巻五の二）という。どちらもその章の結尾のことばである。『二代男』では、むしろ遊里の機構や遊女の生活に関して、種々の角度からの鋭い分析や暴露がなされていることが多い。その対象になったことがらは、直接には金銀に

関するものばかりではないようにみえるけれども、根本は要するにすべて金の支配する世界であることに帰する。西鶴からいまさららしくいわれるまでもないのだが、「元来は此事」（巻五の一）なのである。もちろん、西鶴は、『二代男』でにわかになんかこれを認識し出したのではあるまい。書こうとする動機は、『一代男』執筆中、もしくは、その直後くらいに生じたのであろうが、認識そのものは、早くからあったに違いない。『一代男』で取り上げなかったのは、別の理由があつたのことだと思ふ。

「元来は此事」とは、しかし、よくもいったものだ。金力なくしては成立しない遊びであることほど、歴然たる事実はない。だが、あまりにもわかりきったことであるがために、かえってそこに、一種の盲点があつたのではあるまいか。もちろん遊女や業者の側にはない。『二代男』巻二の五「百物語に恨が出る」に、こういう話がある。夜半になって、やっと勤めから解放された遊女たちが集まり、しばらくの自由な時間を楽しんでいるうち、ために百物語を始めようかとなった。怪談が百に及ぶと、化物が出現するという百物語である。しかし、一向にそのしるしがない。話題がかわって、こんどは、各自の体験談を語り出す。手練手管でしぼり上げ、見ることがもなく零落させてしまった男の話となると、際限もなく続けるのだが、さすがに哀れを催して、みんなしんみりしてしまう。と、そ

の時、天井の裏板が鳴りひびき、いま話題にのぼせばかなりの男たちの姿が幻になって現われる。偽りの心中立ての品は返すとの、さんさんの恨み言に、手の施しようもない。ところがここで、「中にも物かしこき女郎」のたったひと言が、靈妙な威力を發揮した。「各、揚屋の算用残りは」と声高に一喝すると、その声で、幻はたちまちにして消え失せたというのである。

彼女らには、毎日が生きんがための必死の戦いなのだ。この話に出てくる客の噂話にも、命をかけた戦場の追憶が、興奮と快感をもつて語られているように思う。その前の、この章の前半にはまた、決戦に臨むまでの、裏面にかくれた遊女生活の苦悩の日常が切実に描き出されている。しかし、客は違う。万全の邀撃態勢にもろくも打ちひしがれ、文なしにおちぶれて目がさめるものは、まだ浮かばれよう。浮かばれない連中の妄執が生霊となって、臆面もなく舞い戻ってきたのが、この話の幻なのである。百物語がとるにたらぬ迷信にすぎなかったことは、すぐさま証明されたけれども、事実にもとづく体験談は、百物語が不可能とした化物の姿を現前させた。みずからの招いたこの恐怖に、みずからがおののくかみえた彼女らではあったが、態勢のたて直しにさほどの時間は要しなかった。情に溺れてはいけない。心中立てがかりそめの手管にすぎぬことさえ知らぬやつらだとすれば、わからせてやらねばならない。「物かし

『好色五人女』の出発点

こき女郎の一喝は、とりもなおさず、作者西鶴の一喝であったか。虚構を利用し、作者自身の口からではなく、当事者の声を代表して発言させた結晶のひと言であるのに、ぬきさしならぬ迫真力がある。わからずやのなまはんかな男どもに、そろそろ引導を渡すべきだという気持が、すでに西鶴にきざしていたのであろう。

次の作『腕久一世の物語』の松山は、上巻最後の章ではじめて登場する。そのところは前にも引用したとおりで、腕久はそのころ「大方に帥になって」いて、「誰が意見にても聴かぬ」状態であった。もっとも、松山については、彼女自身のこと、腕久とのかわりあいも、直接具体的な記述はないが、腕久が異常な執心を抱いていたに違いないことが、下巻の各章から間接的に読みとれる。ともあれ、腕久はこの時すでに衰運に傾いていた。

必ず色あそび、物も使はずかしこくなる時分は、銀がないものなり。銀があるうちに帥になるものならば、久離きらるる者はあるまじ。腕久も世上のつもりよりは早く覺まれし事不思議なり。さのみ人の目立つ程の事もなかりき。

という一般論の形で、せっかく頂上をきわめた腕久ではあったが、肝心の軍資金が枯渇して、粹人の地位から引退しなければならなかったことが述べられている。『一代男』巻二の四「誓紙のうるし判」は奈良の話であるが、相床の田舎客が帰りぎわに、「怒じて

此中のしなし、物もつかはず、おそらく今といふ今すめになつたと存する」といへば、揚屋の亭主がすかさず、「またたらぬ所がありまことのすめは爰へはまゐらず、内にて小判をようて居ます」とたしなめる一幕がある。十七歳の世之介は、また序の口に近い。粋と金とが両立しがたいことを、遊びに志す者として、まず肝に銘じておかねばならなかつた。世之介は天文学的数字ともいえる遺産を継承したからこそ可能であつたかもしれないが、たいていの財力ではかなわないのが普通である。椀久が破産してしまつたのを「不思議」というのは、尋常の計算では律しきれない急速度の没落であつたことをいふまでであり、実情は「さのみ人の目立つ程の事もなか」つたのである。

『五人女』の清十郎は、幸か不幸か、まだ親がかりの身分であつた。生家の財産を使い果たすまでには至らぬ先に、親仁からストップがかけられる。ここで事実上、彼は破産してしまふ。金がなくなつたとみた客には用がないから、「はや揚屋にはげんを見せて、手扣きでも返事せず、吸物の出時淋しく、茶のもといへば、両の手に天目二つ、かへりさまに油火の灯心をへしてゆく、女郎それぐくに呼びたつる。」という豹変もやむを得ない。

さて、替るは色宿のならひ、人の情は一步小判あるうちなり。

と、ここでも西鶴は、清十郎の述懐とも、作者自身のことばともつかぬかたちで、遊里の本質を極めて明確に断定している。いずれは誰もが必定的に迎えねばならなかつた冷酷な現実である。遊興と金銀との相関関係は、窮極的には、「人の情は一步小判あるうちなり。」という、この一句に集約されるといふてもよい。

このように、『椀久一世』における椀久の没落までと、『五人女』における清十郎の遊興停止までとを、対照しながらみてくると、ほぼ同じような経路を歩んできた兩人であつたことがわかる。どちらも親の財産を遊蕩一途につきこみ、時には人の眉をひそめしめる馬鹿遊びもしたあげく、ようやくにして一つの頂点に達したところに、身の破滅が訪れるのである。してみると、『五人女』の執筆にとりかかつた西鶴の構想の中に、前作『椀久一世』がかなり強く意識されていたらしいことがわかれると思う。創作意識の推移を、さも必然的であるかのように考えて、そのあとづけを試みることは、西鶴にあっては、当を失したうがちすぎに陥る弊も生じよう。しかし、いまの場合、もとよりうがちすぎでも何でもない、極く常識的な検討の結果からいっても、同じモデル小説であり、制作年代の上でも連続する二作品であるから、当然のことだと、そっぽを向いてしまえないほど、密接なつながりをもっているといふてよいのではなからうか。

もっとも、『五人女』が、巻の順番に従つて、第一巻から書きは

じめられたものかどうかは知らないが、それがまず普通の順序というべきであろう。五つの話を一つの作品にまとめた構想、ないしは、これを『好色五人女』と名づけた由来や巻の順序などについては、諸説のあることが、岩波文庫本『好色五人女』の解説などにも紹介されているとおりである。同解説には、山口剛氏（日本名著全集『西鶴名作集』）の能の五番立てに擬する説、暉峻康隆氏（『好色五人女評釈』）の浄瑠璃の五段組織をとり入れたとする説、野間光辰氏（『西鶴年譜考証』）の『五人女』と題した寄せ本の存在を想定する説、これらをあげて、さらに、校註者・東明雅氏自身の、歌舞伎の当り狂言の外題に類似のものが存するという説が付け加えられている。そのうち、野間光辰氏の説は次のとおりである。すなわち、伝存する歌祭文をみると、大経師・おさんのものには「五人女の一の筆」、八百屋お七のものには「五人女の三の筆」、おなつ・清十郎のものには「五人女の四の筆」とあり、西鶴の『五人女』と順序が一致していないこと、また別に、『おせん長右衛門いせさんぐう新五人女』（貞享三年冬刊）と題する歌祭文の寄せ本が存在することから、『好色五人女』以前に、同じような歌祭文の寄せ本があったのではないかと想像される、というのである。

もしこの仮説が認められるとすると、なぜ西鶴が「四の筆」のおなつ・清十郎物語を筆頭に置いたかが、一つの疑問となってくる。

『好色五人女』の出発点

暉峻康隆氏は、年代的に遠い、そして地方に起こった事件を巻一と巻五に、三都で起こった新しい事件を巻二・三・四に置いて、時間的・空間的な配列の考慮が払われているといわれる（『西鶴・評論と研究』）。そこに、作者を支配した題材の実在性と、西鶴文学の諸国咄の性格を認めようとする。この説もたしかにうなずけるけれども、どちらかといえば結果論であって、清十郎物語を第一にしなればならなかった理由には、必ずしもなり得ないであろう。むしろ、そういう意図をもって発想されている説でもない。その他、同氏の浄瑠璃にならった五段組織との論は、各巻五章構成の理由を説明することに重点がおかれているようであるし、山口剛氏の説は、やや付会にすぎるように思われる。東明雅氏説もこれには関係がない。

それよりも私はやはり、平凡でも、『腕久一世の物語』との関連を考えた方がよくなるかと思う。実説が定かでない以上、清十郎が、『五人女』にみるような、腕久型の遊蕩歴をもった人物であったかどうかは、不明というほかはない、が、おなつとの事件を起した場所が姫路であることは少なくとも確かな事実であるうから、姫路と聞いて、西鶴の頭にすぐ浮んできたのが、室津という、古い遊廓のある港町であったことが、推察される。作者が十分な関心を抱いていた土地である。そこが実際に清十郎の出生地であれば、な

おさら好都合であるが、仮にそうでなくても、この地に一人の遊蕩児を誕生させることは、西鶴において、おのずからな連想だということができる。こういういきさつを推定するならば、五組の男女の話を書くとする場合、まず第一番目にどれをとりあげるかが、おおよそきまってくるように思う。その契機が、上に述べた『腕久一世の物語』からの創作意識の推移である。しかしながら、このことは、さらに、同物語の下巻をひもどきながら、検討を進めていかねばならない。

四

『腕久一世』の下巻は、腕久が家屋敷を売りに出すところから始まり、以下、急速度なその転落過程を描いてゆく。場末に隠遁して、一時は妾とのともかせぎに安んじるかにみえた腕久ではあったが、売家の金もほどなく使い果たし、前途は暗い。そこへ偶然訪ねてきた比丘尼姿のかつての遊女の口から、なじみの松山も「是非なきかた」に身請されたと聞き、「狂人のごとく」なる、その女に路銀を恵まれて、江戸へ下ろうとするが、間もなく途中で引き返し、前にも増してうらぶれた生活に落ちた。それでもまだ性こりもなく、昔の色友達のあとについて新町をのぞいてみたりする。しかし、松山のこと話題にのぼって、一人で逃げ出し、使い捨てた金

の愚痴をこぼしているところを友達らにつかまり、そのはずみに、とうとう本式に発狂してしまう。かりそめに正気に戻った折に、すめられて頭をそるが、ともすれば思うは松山のことばかり。住居も定まらぬ錯乱の状態で、あらぬたわごとを口走り、大坂の街をさまよい歩く乞食坊主の身となっても、意識のうちにはまだ昔の榮華が残っている。大川筋の舟で騒いでいる客をかいま見れば、身請けした女郎を西国へ連れて帰るところらしく、それにつけても、わが身の不運が嘆かわしい。ねたましさにたえきれず、その舟に愚かなちよっかいをかけたばかりに、大尽の怒りにふれて水中にたたき落され、ついに三十三歳の命を閉じることになった。

没落後の腕久は、こうして水死するまでの三年間を、虚無と狂乱のうちに終始する。この物語は、その腕久の心理や行動をよく描写し得て、なかなかの異彩を放つ。もっとも、松山の名はそうしたたびたび出てくるわけではなく、腕久の彼女に対する思慕の情も、右のあらすじの紹介で述べたほど、必ずしも文章の表面にあらわにされてはいない。むしろ作者は、意識的にこれをあらわにすることを避けたいらしい。たとえば「現の情物語」（第四章）で、宿も定まらず、材木置場にごろ寝していた腕久に話しかける一人の女性がある。ゆり起しても目覚めないなので、再会のあてもあるかどうかわからぬまま、女物の黄八丈を着せかけ、紙包みの氷砂糖を枕元に残

して行ってしまった。これを松山と見るかどうかは、読者の判断に委ねられている。朝になって目覚めた椀久は、氷砂糖は「うれしく」頂戴するけれども、黄八丈はその場で捨ててしまふ。これなども、単に椀久の痴呆性を写すためではない。松山が実際にそんなことをしたかどうか、などというのも愚問に属する。椀久の身になってみれば、事実がどうであろうと、松山でなければならぬはずだと、読者は考えるに違いない。故意にあいまいにして読者の推定を誘導しようとする、作者の用意がうかがわれるように思う。こういう扱いになっているけれども、そうだからこそ、没落後の椀久は、片時も松山の幻影を払拭し得ない、痛ましい純情の持主として描かれていることにならう。身の破滅も、発狂の原因も、この純情のゆえであるが、同時に一面では、忘れようとして忘れ得ない脳裡の面影を支えとして、どうにか三年間を過ごし得た椀久であったともいえよう。少し極端にいえば、下巻の椀久は、すべて松山を軸として回転しているのではあるまいか。

宿命的な悲劇の人物であった。結びの一文など、この作者にしては比較的珍らしい感傷的な筆致も用いられている。が、それは、『五人女』の大半の巻にみられるように顕著ではない。『五人女』では、たとえば巻一でも、第五章の全部を費して、清十郎没後のおなつに、深い傷心と同情が寄せられている。讚美的でさえある。同

『好色五人女』の出発点

じ悲劇の主人公でありながら、その間に、かなりの開きがある。椀久の場合も、男女の差こそあれ、おなつと同様、純情に殉じたのであるにもかかわらず、その哀愁に満ちた境涯に、作者の同情心などはほとんど感じられない。といつて、ことさらに冷たくあしらっているふうでもなく、いわば、感情を押し殺して冷静に、淡々と筆を進めている。

理由は、同じく純情に殉じたといつても、その純情あるいは殉じた方についての西鶴の評価が、はっきり左右に分かれているからなのであろう。おなつは清十郎のために、文字どおり、乙女の純情を捧げた。だが、椀久はそうではない。相手が遊女である。「人の情は一步小判あるうちなり。」とは、遊興と金銀との窮極的な関係を集約したものであることをさきに述べた。清十郎が親仁に見放されて、揚屋の待遇が掌をかえすように悪くなった個所である。単に「金銀」といわないで、「一步小判」といつた。祝儀には普通これを用いられたからである。「情」とは、いうまでもなく、それがほしさの、心にもないお愛想である。下り坂の客にいつまでも御機嫌をとるほどのんびりしてはいられない。全盛の大金がもてはやされるのも、ほかに魅力があるわけではない。金がすべてである。わかりきつたことだ。そればかりではなからう。遊女の真情と覚しきものもまた、その実態は偽装された仮面にしかすぎない。「此里の事

手としての使命も生じよう。封建制度のもたらしたきびしい現実の壁に、身を挺して突入していかねばならない。壁は打ち破られないであろう、勝利をつかむことは不可能であろうが、敗北は覚悟の純情と至誠と勇気があって、はじめてこの使命が達成される。清十郎は、その旗手たるにふさわしい人物として、十分な素質と経歴に恵まれるように仕立てあげねばならない。婉久のような、妄執にさまよう亡者であってはいけない。木石では困る、遊興歴は豊富であることが望ましいけれど、いまはすでに完全に足を洗った男でなければならぬ。別の世界で活躍させるのだ。表面はいかに律義者を装っていても、おのずからにじみ出る「内証」のよさ。色好みの十六娘がうつつを抜かすほどの相手としては、こういう男であってこそ、最もすぐれた適格性をそなえる。

清十郎の人物形象をこのように想定するとき、彼の前歴を紹介した第一章の意味が、はじめて明らかになるであろう。それは決して本筋から離れた無用の存在ではないばかりか、さらに積極的な理由と意義をもった、重要な発端であると称することができるのではあるまいか。西鶴らしい描写のおもしろさのみに満足すべきものではないと思う。『五人女』の構想が、必然的にこれを必要としたといふべきである。

ただ、ここで、婉久型の亡者はどう処理されたのか、という問題

が依然として残る。清十郎ばかりが成仏し得ても、婉久は救われな
い。だが、やはり西鶴は、これを持ってあましてしまったらしい。解
答は『置土産』まで保留される。そのかわり、しばらくは遊里から
別れる。『五人女』首章の、清十郎の遊里訣別は、あるいは、作者
のこの気持を代弁する、未完成な答案でもあったかもしれない。

五

以上、『五人女』おなつ・清十郎物語の第一章の意義を、主とし
て『婉久一世の物語』との関連から考察してきたのであったが、な
お、この二つの物語全体の関係について、簡単に付け加えておこう。
おなつは、清十郎が処刑されたと知って、一時発狂する場面が
『五人女』にある。婉久も松山の身請けを聞いた瞬間、「狂人のご
とく」なっている。ともに、失った愛人に対する追慕の心が彼ら
を狂わせた。おなつの発狂が、もしも作者の創作であるのなら、
そのヒントが婉久にあったとみることができる。創作でなく、事実
にもとづくのであれば、なおさらのこと、婉久の人間像が、このこ
とを媒介項として、清十郎の人物形象に大きく反映したのではない
かとの推測が成り立つであろう。

また、『五人女』の方の末尾は、

其比は上方の狂言になし、遠国村く里く迄、ふたりが名を

流しける。是ぞ恋の新川、舟をつくりて、おもひをのせて、泡のあはれなる世や。

となっているが、『梶久一世』にも、

世の取沙汰を大和屋が狂言に作りて、甚兵衛が身ぶり、其のまま梶久を生きうつし、是を見し人、恋を知るも知らぬも涙を求めける。

(下巻第六章)

とある。文章の趣も似ているように思われるし、どちらも「狂言」云々といっているのは、この両作品の外面的な制作動機が同一であったことを語る。

これら二つの点は、『五人女』の巻一が、『梶久一世』を強く意識して書かれたものであることの一証となし得るであろう。『梶久一世』が、単に『五人女』の発端の部分に密接につながりだけではなく、実は物語全体としても、両者が少なからぬ関連性を有するものであることが察知できると思う。